

# ギリシア人植民都市アイ・ハヌムの滅亡

— 中国史料からの考察 —<sup>1)</sup>

小 谷 仲 男

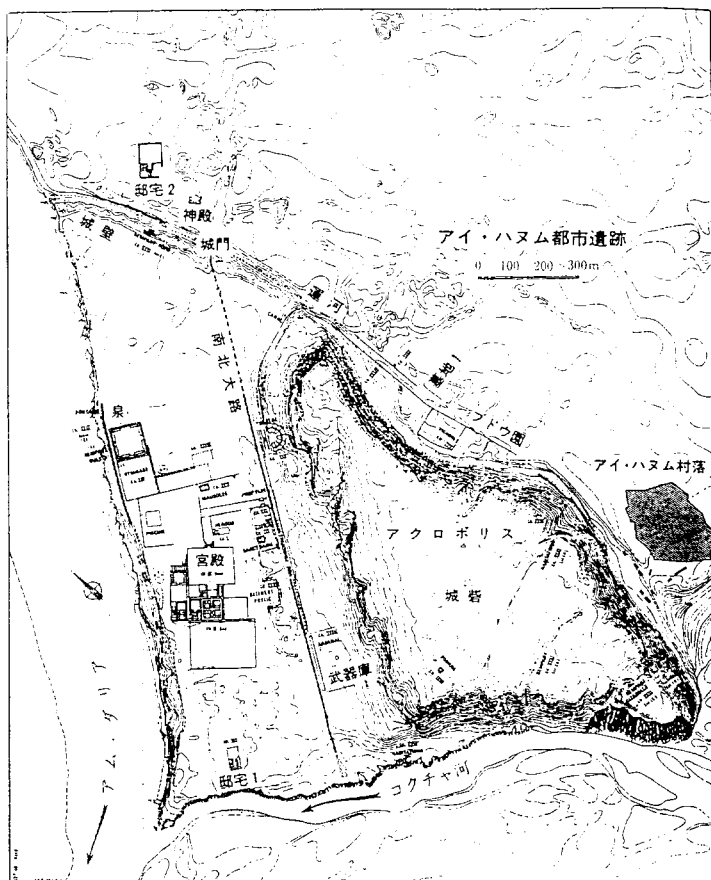
アイ・ハヌム遺跡は古代バクトリア（現在のアフガニスタン北部）に存在したギリシア人植民都市のひとつであった。バクトリア・ギリシア王国の首都バクトラ（現在バルフ）の東約 300 km, 東方に偏って位置した。石灰岩製のコリント式柱頭, 円柱, 礎石を使用した宮殿, 神殿, 体育場などの建造物, それにアクロポリスや半円形劇場まで備えた本格的ギリシア人都市であった。ギリシア語碑文, 文書, 彫刻も出土し, 本国を離れたギリシア人がそこで本国の生活習慣を守り, いわば植民地的活動をしていたことは明らかである。アイ・ハヌム遺跡の発見は 1963 年のことで, それまでアフガニスタンの国境地帯, アムダリアとコクチャ河の合流地点の要害の地に人知れずに埋もれていた<sup>2)</sup>。本格的な発掘調査は 1965 年より, フランス考古学調査隊の手で毎年継続されたが, 1979 年のソ連軍侵攻の前年に中断され, 今日に至っている。P. Bernard 氏はアイ・ハヌム発掘調査の責任者であった。私は 1960 年から 1965 年までの期間, アフガニスタンで仏教美術を中心とした発掘調査に従事していたこともあって, アイ・ハヌムの発掘の推移を最大の関心をもって眺め, フランス学士院紀要 *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* (略号 CRAI) に掲載される発掘調査の年次報告を熱心に読んでいた一人である。

第一の関心はアイ・ハヌムで発見されるヘレニズム美術がガンダーラ仏教美術と直接関係するかどうか。現在のところ, 出土貨幣で見る限りアイ・ハヌムのギリシア人都市はクシャン王朝勃興以前, つまりガンダーラ美術の誕生以前に滅亡しており, アイ・ハヌムとガンダーラ美術の直接的な関係はないと考えられる。また壁柱の柱頭飾りやヘルメスの彫像を見ても, それらはヘレニズム末期の作品であり, あのガンダーラ美術の多様さ, 流麗さに発展する力はない。

第二の関心として実際にいつ, 誰がアイ・ハヌムのギリシア人都市を滅亡させたか。ギリシア人バクトリア王国が滅亡してガンダーラ美術が誕生するまでの歴史は不明な部分が多く, 暗黒の時代と呼ばれる。アイ・ハヌム遺跡の考古学的編年 Chronology に関して, まずアイ・ハヌムのギリシア人都市の創建年代から考えてみたい。アイ・ハヌム遺跡の中央部に祀堂（墓廟）が見つかり, 都市の創設者が祀つられたものと推定された。祀堂から出土したギリシア語刻文によれば, その人物の名はキネアス Kineas であった。キネアスはセレウコス 1 世の部将のひとつ

りと考えられ、300 B.C.前後にこの都市を建設したのではないかと。そして250 B.C.頃、ギリシア人ディオドトス Diodotus がセレウコス王国から独立し、バクトリア王国をつくりあげると、アイ・ハヌム都市もそのなかに組み込まれたとおもえる。アイ・ハヌムの滅亡については、発掘の過程から大規模な掠奪と破壊、それにともなった大火災が発生し、都市はほとんど機能を失った事実が裏付けられた。発掘者の P. Bernard 氏は最初その年代を100 B.C.頃、遊牧民の侵入によるものと推定した。廃墟の一部は土着人にしばらく占拠された形跡があり、最終的なアイ・ハヌムの放棄は50 B.C.頃と結論した (Bernard 1973:111)。当時それを読んだ私の感想は、それが発掘の観察を踏まえての結論としても、中国史料から考えると、その推定年代は遅すぎると感じた。

しかし1978年度(最後の発掘調査)の報告において、Bernard 氏はその年度の新発見の資料に基づき、アイ・ハヌム滅亡の推定年代を大きく修正し、145 B.C.頃とした。この年代ならば私も大いに賛成したい。新しい発見資料とは宝物庫から出土した陶片墨書であった。それは貴重なオリーブ油を大甕に移し代えた時の記録で、大甕の表面にギリシア語で分量と日付(24年)、立会いの役人の名前



(二人連名)が記してあった。都市の掠奪は墨書の二、三年後(立会いの役人名の組合せから推定)であり、その時オリーブ入り大甕も破片となって飛び散った。24年をバクトリア王国のユークラティデイス Eucratides 即位24年として計算すれば148 B.C.頃となり、上述のような滅亡年を得る。この Bernard 氏の推定年代は、宝物庫の発掘を担当した C. Rapin 氏やアイ・ハヌム出土土器を研究する B. Lyonnet 女史らによって継承され、補足させられている。(Figs. 1, 2)

私はこの Lyonnet 女史と昨年春にストラスブール大学で開催されたアフガニス

Fig.1 アイ・ハヌム遺跡平面図(Fouilles d'Ai Khanoum IV, 1988による)

タン美術考古学会 (Dr. Z. Tarzi 主宰, 2000年3月17-18日) で同席し<sup>3)</sup>, 直接に意見交換することができた。私が「Who ruined Ai Khanoum?」と質問すると, 彼女は「Yue-zhi (月氏)」と即座に答えてくれ, 思わず握手をかわし, 賛同の気持ちを示した。翌日, 彼女は最近の報告書 (Lyonnet 1997) を持参し, 該当箇所を示し, その Commentaire (解説) に詳しく書いてあるから読んで欲しいと言った。同書は私も日本ですでに目を通しており, B. Lyonnet 女史のもうひとつの論文 (Lyonnet 1991) も読んだことを思い出し, その場で彼女の見解をほぼ理解することができた。そしてアイ・ハヌムを含むギリシア・バクトリア王国の滅亡を遊牧民族の到来 (月氏西遷) と結びつけて考えることには賛成であるが, 中国史料の理解や利用の仕方にまだ問題があると私の意見を述べた。それが今回私のテーマ, 「ギリシア人植民都市アイ・ハヌムの滅亡—中国史料からの考察—」である。

Lyonnet 女史はアイ・ハヌム都市末期の層位からヘレニズム的伝統に基づかない土器を検出し, それを掠奪者大月氏の所持した土器と推定した。それは小砂利混じりの粗製で短頸, 平底のトックリ形土器である (高さ 25-35cm)。同じ形式の土器はタジキスタン, ワフシ Wakhsh 河上流のクシロフ Ksirov 遺跡からも出土している (竪穴土坑墓, この土器のほか30墓中6墓から Eucratides 貨幣を模造した小貨幣が出土)。Lyonnet 女史はこの土器をクンドゥズ kunduz 河下流域 (Asqalon), またフェルガナ Ferghana 盆地 (古代大宛国) にも分布することを確認した。しかしそれ以上東方の分布は確認できず, 中国の西北辺境から移動してきたという大月氏の足跡をあとづけるには不十分であった。そこで Lyonnet 女史はアイ・

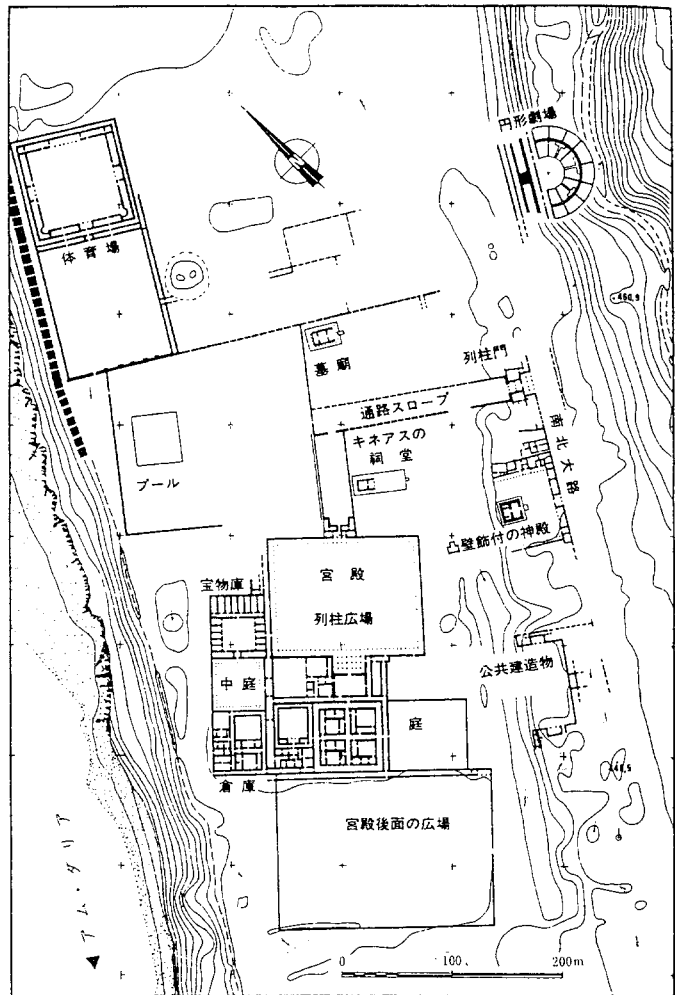


Fig. 2 アイ・ハヌム宮殿址とその周辺 (Fouilles d'Ai Khanoum II, 1983による)

ハナムの遺跡から台付きゴブレット（杯）がひとつも出土しない現象に注目した。台付きゴブレットは角杯の本体に高い台がついた形式の土器で、赤色化粧のかかった精製のものも多く、アム河流域に広く分布することが知られている。Lyonnet 女史はこの現象を地理的、そして民族分布に関わる相違と考えた。クンドゥズーフェルガナを結ぶ線より東側では、遊牧民 Yueh-chi [Yue-zhi] 月氏が侵入し（彼女は大月氏をトカラ族 Tochaes に比定）、アイ・ハナムを滅亡させた（145 B.C.頃）。それより西側、バクトリア西部にはスキタイ（Sakas 塞）が侵入し、残余のバクトリア王国を滅亡させたと考えた。（Lyonnet 1991: 159, Lyonnet 1997: 167-169）。

ギリシア人バクトリア王国の滅亡に関わる有力な遊牧民族、「塞」と「月氏」とを東西に並存させる考え方は、既に P. Bernard, *Les nomades conquérants de l'empire gréco-bactrien. Réflexions sur leur identité ethnique et culturelle. CRAI* 1987 に述べられている。Lyonnet 女史の考えもそれに基づく。Bernard 氏は上記論文のなかで、スルハン・ダリア流域のハルチャヤン遺跡（宮殿）で発掘された騎馬群像（粘土像）は Yueh-chih [Yue-zhi] 月氏（Tochaes＝トカラ族に比定）とスキタイ（Sacae, Sacarauques 塞）との交戦図で、月氏が勝利したことを記念したものと解釈した。そしてバルフ Balkh の西、約 100 km のシバルガン近郊で発見されたティリア・テペ Tillya-tepe 墓の黄金遺宝は月氏のものではなく、スキタイ系遊牧民（Sacae 塞）のものであろうとした（Bernard 1987: 768）。

私はそのような中国史料の解釈と、それに基づくギリシア・ローマ史料との対比自体に疑問を抱く。確かにギリシア・ローマ史料（Strabon XI,8,2; Justin, Prologue.XLI, XLII）と漢文史料（『史記』大宛伝、『漢書』、『後漢書』西域伝）を対比しながら、バクトリア・ギリシア人王国の滅亡を考えるのは常道である。しかしその対比の結論はさまざまであり、かりにひとつの結論に到達したとしても、多くの自己矛盾をかかえざるをえないのが現状である。バクトリア王国の滅亡というひとつの事実をめぐって、どうしてそのような混乱が生じるのか。私も 1960 年にはじめてアフガニスタン、パキスタンにおいてガンダーラ仏教美術の発掘調査に従事し、研究をはじめて以来、やはりこの難問にぶつかった。W.W. Tarn, *The Greeks in Bactria and India*. 1938 や A.K. Narain, *The Indo-Greeks*. 1957 を読んでも納得いく説明は得られなかった。混乱の原因はどこにあるのか。自分で考えはじめ、ようやくたどりついた結論は、司馬遷『史記』と班固『漢書』が「月氏西遷」について記す文章に相違があり、それも矛盾する二者択一的内容であることに気付くことであった。詳しくは小谷『ガンダーラ美術とクシャン王朝』第一章「塞と大月氏」、『大月氏—中央アジアになぞの民族を尋ねて』第二章「月氏西遷をめぐって—塞民族の虚構性」を参照して欲しい。ここでは要点のみ述べる。

『史記』大宛伝に記載される張騫の遠征（139—126 B.C.）報告には次のように述べられる。

もともと月氏は敦煌、祁連山の地帯に居住していましたが、匈奴に撃破されると、遠方

に移動しました。かれらは大宛〔フェルガナ〕を通過し、西方の大夏〔バクトリア〕を攻撃し、征服しました。そしてオクサス河〔アム・ダリア〕の北岸を本拠として、王庭をかまえました。(大月氏……始月氏居敦煌・祁連間、及為匈奴所敗、乃遠去、過宛、西擊大夏而臣之。遂都嬌水北、為王庭。)

大夏……大月氏が西遷してきた時、大夏を攻撃して征服し、大夏の住民はみなその支配を受けることになりました。(大夏……及大月氏西徙、攻敗之、皆臣畜大夏。)

大月氏はその国王が匈奴に殺されると、太子を新たな国王に立て、そして大夏を征服し、その地に移住していた。土地は肥沃で敵も少なく、すっかりその地に安住し、また自ら漢と遠く隔たっていることを考え、もはや〔漢と共同して〕匈奴に報復する気持を持ち合わせなかった。張騫は月氏から大夏に足を運んだが、結局月氏から期待した返答を得ることができなかった。(大月氏王已為胡所殺、立其太子為王、既臣大夏而居。地肥饒少寇、志安樂。又自以遠漢、殊無報胡之心。騫從月氏至大夏、竟不能得月氏要領。)

以上の内容がストラボン『地理誌』(Strabon, XI,8,2)に述べられるバクトリア・ギリシア人王国の滅亡記事、つまり「ヤクサルテス(シル・ダリア)のかなたから侵入し、ギリシア人からバクトリアを奪った遊牧民のスキタイ人(サカ)」と同一事件、同一内容をさしていることはほぼ疑いない。むしろ東西史料の見事な一致に驚く。ギリシア人バクトリア王国の滅亡をもたらした遊牧民スキタイは西遷してきた大月氏のことである。(Figs. 3, 4)

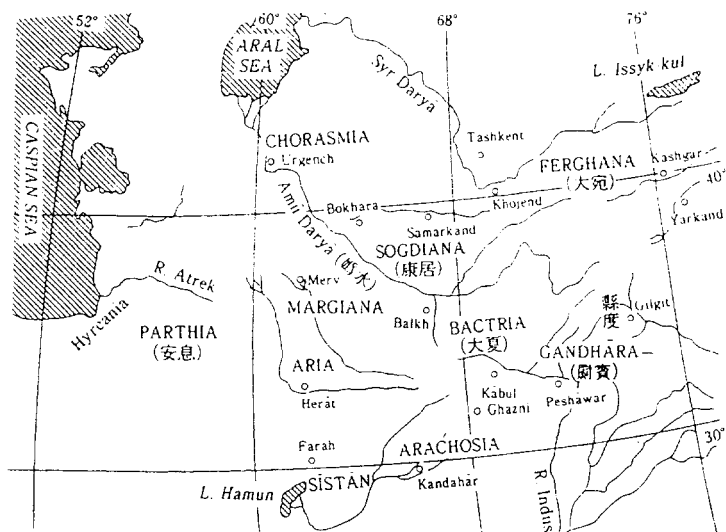


Fig. 3 中央アジア地図(B.C. 1～2世紀) Map of Central Asia

しかしここに班固『漢書』を考慮に入れると、複雑になる。班固は月氏西遷の歴史のなかに「塞」という古い民族を登場させる。『漢書』は次のように記す。

烏孫(ウソン)国はもと塞が居住した土地であった。大月氏が西遷する途中に塞王を撃破すると、

塞王は南のかた縣度（ギルギット）を越えて逃れ、大月氏がその地を占拠した。その後、烏孫王昆莫が大月氏を撃破すると、大月氏は逃れ去り、西のかた大夏を征服した。かわって烏孫王昆莫がその地を占拠した。そのため烏孫のなかには塞種、大月氏種が混じるという。（烏孫国……本塞地也。大月氏西破走塞王，塞王南越縣度，大月氏居其地。後，烏孫昆莫撃破大月氏，大月氏徙西臣大夏，而烏孫昆莫居之。故烏孫民有塞種，大月氏種云。）

鬲賓国 [ガンダーラ] ……昔、匈奴が大月氏を撃破したとき、大月氏は西移して大夏を征服し、塞王のほうは南移して鬲賓を支配した。塞種は [国が滅んで] 分散し、各地で国を立てることがあった。疏勒の西北方の休循、捐毒などはみな旧塞種の立てた国である。（鬲賓国……昔匈奴破大月氏，大月氏西君大夏，而塞王南君鬲賓。塞種分散，往往為数国。自疏勒以西北，休循，捐毒之属，皆故塞種也。）

班固は司馬遷『史記』より約180年後に『漢書』を編纂した。班固は『漢書』西域伝・張騫伝の古い時代記述をほぼ司馬遷『史記』大宛伝に依拠した。しかし「大月氏西遷」に関しては、上述の史料に見られるとおり、少し事情が異なる。大月氏の西移の前に立ちはだかる「塞」民族は、『史記』を読むかぎり、司馬遷も、張騫当人も知らないものであった。どうして班固は『史記』の文章を改作してまでも「塞王南遷」あるいは「塞種分散」の記事を挿入しようとしたか。

私はこの「塞」族の記事はシャキヤムニ・ブツダの生れたシャキヤ（釈迦）族の歴史を仏教の中国伝来の初期において、『漢書』の編者班固が誤解したものと考え。インド・シャキヤ族の民族的、地理的内容を十分に理解しないまま、自己流に解釈した。それはブツダの在世中に釈迦（シャキヤ）族が隣国コーサラ国の大軍に攻略され、釈迦族の大半が虐殺され、釈迦族の国が滅亡したという悲劇の物語である。これは当時の古代インドにおける都市国家どうしの対立、戦争の歴史のなかで、実際に起り得た事であったと考えられる。そうしてシャキヤ族仏教徒が各地に離

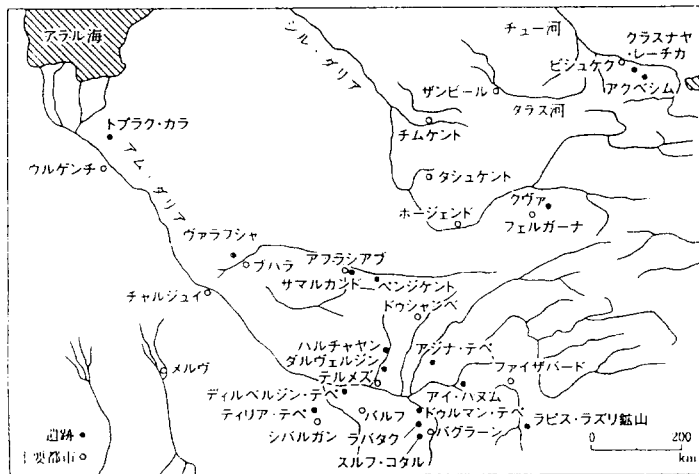


Fig. 4 アム・ダリア、シル・ダリア流域の考古学遺跡  
Archaeological sites in the Amu-and Syr-Darya

散し、時には他国の王位についたというのもある程度事実を反映したものであったかもしれない<sup>4)</sup>。

しかしシャキヤ（釈迦）族のカピラヴァストゥ国はヒマラヤの山麓にあった。『漢書』の編者班固はそれを中央アジアの天山山中に置き、「塞王、塞種」の歴史として叙述を試みた。ガンダーラ語ではシャキヤ Śākya はサカ Saka と訛る。塞と釈迦は同一語である。もし班固が釈迦族国の地理的位置をもう少し正確に認識しておれば、今日のこのような混乱を生じさせることはなかったはずである。塞王が南走して罽賓国（ガンダーラ）を支配し、君臨したというのは、ガンダーラ仏教がバミール山中を経由し、西域、中国へ伝播した道筋をそのまま逆にどったものにすぎない。

以上が『漢書』の「塞」を非実在のものとして大月氏の西遷の歴史から排除しようとする私の推理根拠である。かりに「塞」が実在のものとしても、「塞王南君罽賓」と記されるように、「塞」は天山山中から直接南のかたバミール、カラコルムを越え、インダス上流からガンダーラ（罽賓）に逃れたのであり、アフガニスタン北部のギリシア人バクトリア王国の滅亡とはなんら関係がない。塞、大月氏を並べてストラボンの『地理誌』（XI,8,2）が列举するバクトリア王国を滅亡させたスキタイの四部族 Asii, Pasiiani, Tochari, Sacarauli と対比させることはできない。おそらく混乱を招くだけである。「塞」民族は非実在であり、少なくともバクトリア王国の滅亡とは無関係である。したがって私たちはストラボンのいう「ヤクサルテス河（シル・ダリア）のかなたから侵入して、ギリシア人からバクトリアを奪った」スキタイ（Sacaе サカ）と『史記』の「西撃大夏而臣之」の大月氏とを同一視することが先決であると考え。アイ・ハヌム都市の滅亡も残余のバクトリア・ギリシア人都市の滅亡も、みな「大月氏の大夏征服」の中で考えることができる。新たに提案された 145 B.C. 頃というアイ・ハヌム滅亡の年代は、その意味でも妥当なものと賛成したい。

かつて A.F.P.Hulsewé は『史記』巻123「大宛伝」のオリジナル・テキストが散佚してしまったこと、現行のテキストは『漢書』巻61「張騫伝」から復元されたものにすぎないことを主張した（Hulsewé 1975, Hulsewé 1979: 3-39）。その考えは榎一雄によって完全に論駁された。榎一雄は「塞」に関わる『史記』と『漢書』の文章を比較し、後世の新しい知識に基づいて『史記』大宛伝の文章を改めることは可能であっても、逆に『漢書』張騫伝の記事を『史記』大宛伝のように書き改めることは不可能であるとした（榎一雄 1982: 138, 同 1983）。榎一雄は班固『漢書』の編纂当時、月氏の移動あるいは烏孫建国に関して二通りの説話ヴァージョンが存在したと指摘した。しかし歴史事実としては二者択一であり、後世の知識に基づく「塞」の記事を疑わしいとせねばならない。欧米の研究者のあいだでは、なお Hulsewé の主張が無批判に採用されているのは残念である（Fussman 1993: 123）。

## 注

- 1) 本稿は2000年7月1、2日、金沢大学において開催された第7回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会において報告したものである。今回の研究会にはアイ・ハヌム遺跡の発掘調査隊長をつとめた Paul Bernard 氏（フランス学士院）が特別に招聘され、Ai Khanum (Afghanistan): a Greek colony in Central Asia の演題で、スライドを使用しながら約1時間にわたり報告を行なった。私は研究会の二日間、Bernard 氏と直接に意見交換をすることができた。Bernard 氏はアイ・ハヌム都市を荒廃させた遊牧民について、かれらが残したとおもえる銀板（宝物庫出土）とその上に刻んだ未解読の刻文（アラム系文字）が手がかりになるのではないかと語ってくれた。
- 2) 私は下記の Z.Tarzi 氏の論文（Tarzi 1996）に接するまで、アイ・ハヌム遺跡の発見は1960年代前半のことと理解していた。しかし最近 Tarzi 氏はカープル博物館の古い書類を整理しているうちに、フランス調査隊員でハッダの発掘者として知られる J. Barthoux が1926年に既にアイ・ハヌムを発見し、当時の隊長 A. Foucher に報告していることに気づいた。Barthoux はハッダの発掘調査の間をぬって、アフガニスタン東北部一帯を踏査した。その時、アイ・ハヌム遺跡を訪れ、そこでギリシア式円柱の断片を発見した。もしその時の発見が発掘調査に結びついていたら、その後のアフガニスタンにおけるフランス隊の活動および成果は今日のものとはがらりと変わったものになっただろう。なおこの Barthoux 以前に、イギリス軍人の John Wood がアム・ダリア（オクサス河）の源流調査の途中でアイ・ハヌム遺跡を訪れ、I-Khanam の名で記述していることも同時に知り得た（Tarzi 1996: 608, note 33, Wood 1872: 259-260）。
- 3) ストラスブール大学における会議の概要（発表者と題目）については、*Circle of Inner Asia Art, Newsletter* 12, SOAS, University of London, 2000 December, p.40 に報告されている。
- 4) 釈迦国滅亡の悲劇は多くの仏教経典、とくに漢訳経典中に語られる。虐殺を招いた原因はコーサラ国王 プラセナジツが釈迦族に婚姻を申し出で、それに対して誇り高い釈迦族は婢女を王女と偽って嫁したことによる。その子のヴィルダカ（瑠璃王）は釈迦族から下賤婢子と侮辱され、王位についた後、軍隊を率い釈迦族を攻撃して大量虐殺をはたらいた。経典中には虐殺を免れた釈迦族が新しい土地に逃れて王位に即いたと記すものがある（『増一阿含経』26, 『根本説一切有部毘奈耶雜事』8, 『大唐西域記』6）。玄奘三蔵が西北インドの烏仗那国（ウディヤーナ、現パキスタンのスワート峡谷）で聞いた伝承によると、その国王の祖ウッタラセーナ（上軍）の父は虐殺を免れてこの地に逃れた釈迦族の一人であり、ブッダの涅槃の際には仏舎利の分配に与かったという。それゆえ烏仗那国内に建立された上軍塔にはブッダの真骨が安置されているという（水谷 1971: 107-111）。最近、ウディヤーナ（Odi）王セーナヴァルマが寄進した舎利容器とそれに伴う長文のカロシュティ刻文（西暦1世紀）が発見され、そこにかれらの祖先ウッタラセーナの名が記されていることが判明した。玄奘の伝える烏仗那国の王統説話が古からの伝承であることを裏付けた（Salomon 1986, 定方晟 1988, 定方晟 1998: 166-173, M.L. Carter 1993: 67-68）。西北インドの人びとが仏教を信奉することによって、自分たちも釈迦族の仲間であり、その末裔であるという意識を持つようになったことがわかる。一方、現在歴史上の記述ではクシャン族に先立って中央アジアから西北インドに侵入し、それゆえインド・サカ（スキタイ）と呼ばれている民族が存在するとされているが、私の推測ではかれらの大部分は西北インドの土着人のことであつたと考える。かれらは西北インドの方言であるガンダーラ語を話し、固有のカロシュティ文字を使用した。多くは熱心な仏教徒であつた。当時、ヒンドゥクシュ山脈を越えてインドに侵入した中央アジアの民族はクシャン人（月氏）以外には存在せず、征服者であり異教徒であるクシャン人を迎え、かれらを説得し、ガンダーラ仏教の熱心な擁護者、あるいは仏教徒に改心させたのも、これら西北インドの土着仏教徒たちであつたとおもう（小谷 1996: 94-98）。今後の研究としては、これら西北インドの土着人が征服者クシャン人とどのように協力し、ガンダーラ仏教およびガンダーラ美術の生成、発展に寄与したかが大きな課題となろう。



参考文献 Bibliography

- Bernard, P. 1973. *Fouilles d'Ai Khanoum I (Campagnes 1965, 1966, 1967, 1968)*.  
*Mémoires de DAFA*, Tome XXI, Paris.
- Bernard, P. 1980. Campagne de fouilles 1978 à Ai Khanoum (Afghanistan). *CRAI*: 435-459.
- Bernard, P. 1987. Les nomades conquérants de l'empire gréco-bactrien. Réflexions sur leur identité ethnique et culturelle. *CRAI*: 758-768.
- Cater, M.L. 1993. A Scythian Royal Legend from Ancient Uḍḍiyāna. *Bulletin of the Asia Institute*. Vol.6 : 67-78.
- Fussman, G. 1993. L'Indo-grec Ménandre ou Paul Demiéville revisité. *Journal Asiatique* 281: 61-137
- Hulsewé A.F.P. 1975. The problem of the authenticity of *Shih-chi* ch. 123, The Memoir on Ta Yüan. *T'oung Pao* 61: 83-147.
- Hulsewé, A.F.P. 1979. *China in Central Asia: An Annotated Translation of Chapters 61 and 96 of the History of the Former Han Dynasty*. Brill, Leiden.
- Lyonnet, B. 1991. Les nomades et la chute du royaume gréco-bactrien : quelques nouveaux indices en provenance de l'Asie centrale orientale. Vers l'identification des Tokhares-Yueh-chi ?, pp.153-161 et pls.LXI-LXIII in: P. Bernard et F. Grenet ed., *Histoire et cultes de L'Asie centrale préislamique. Sources écrites et documents archéologiques*. Paris.
- Lyonnet, B. 1997. *Prospections archéologiques en Bactriane orientale (1974-1978)* : *Mémoires de la Mission archéologique française en Asie Centrale* 8. Paris.
- Narain, A.K. 1957. *The Indo-Greeks*. Oxford.
- Rapin, C. 1992. *Fouilles d'Ai Khanoum VIII : La trésorerie du palais hellénistique d'Ai Khanoum. Mémoires de DAFA*, Tome XXXIII, Paris.
- Salomon, R. 1986. The Inscription of Senavarma, King of Odi. *Indo-Iranian Journal* 29-4 : 261-293.
- Strabo. *The Geography of Strabo*, with an English translation by H.L.Jones. Vol.5 The Loeb Classical Library, London 1961.
- Tarn, W.W. 1951. *The Greeks in Bactria and India*. Cambridge.
- Tarzi, Z. 1996. Jules Barthoux: Le découvreur oublié d'Ai Khanoum. *CRAI*: 595-608.
- Wood, J. 1872. *Journey to the source of the Oxus*. London. re. Karachi 1976.
- Zurcher, E. 1968. The Yueh-Chih and Kaniska in the Chinese Sources. pp.346-390 in: A. L. Basham ed., *Papers on the Date of Kaniska* . Brill, Leiden.
- 榎 一雄「漢書西域伝の研究」『東方学』64, 1982 (『榎一雄著作集』7, 汲古書院 1994, pp. 32-53 所収).
- 榎 一雄「史記大宛伝と漢書張騫・李広利伝との関係について」『東洋学報』64-1・2, 1983 (『榎一雄著作集』7, pp. 54-82 所収).
- 小川環樹他訳『史記列伝』五(大宛伝), 岩波文庫 1975.
- 小竹武夫訳『漢書』列伝五(西域伝), ちくま学芸文庫 1998.
- 小谷伸男「シノ・カロシュティ貨幣の年代-付録『後漢書』西域伝訳注-」『富山大学人文学部紀要』第30号, 1999, p.17-48.
- 小谷伸男『ガンダーラ美術とクシャーン王朝』同朋舎出版(京都大学学術出版会)1996.
- 小谷伸男『大月氏 -中央アジアに謎の民族を尋ねて』東方書店 1999.
- 定方 晟「セーナヴァルマ刻文の研究」『東洋学報』69, 1988, p.159-186.
- 定方 晟『異端のインド』東海大学出版会 1998.
- 玄奘著, 水谷真成訳『大唐西域記』(中国古典文学体系 22), 平凡社 1971.

## English Summary

Who devastated the Greco-Bactrian city of Ai Khanum ?

A proposal based on Chinese historical sources

by Nakao Odani

According to the latest reports from the excavations at Ai Khanum, the French archaeological mission has revised the date of the devastation of the city from ca.100 B.C. to ca.145 B.C., based on new evidence from the inscriptions found in the treasury. This seems to be more probable considering the Chinese sources.

So far the *Sai* in the *Han-shu* passages have been thought to be Scythians or Sacae who, according to Strabo and Trogus, came from the other side of the Syr-Darya and conquered Bactria from the Greeks. However, I doubt that the *Sai* really existed. The *Sai* might be a fictional people whom the editor of the *Han-shu* misguidedly inserted into the parallel passages of the original *shi-ji*, interpreting them in connection with the Buddhist Śākya. Thus, I believe that the Scythians or Sacae should not be identified with the *Sai*, but with the *Da Yue-zhi*, who overcame *Da-xia* (Bactria) after being driven westward by the *Xiong-nu* in ca.170 B.C.

The question is then, who were the so-called Indo-Scythians or Indo-Sakas in Gandhara. The story of the exile of the *Sai* king in the *Han-shu* resembles the Buddhist legend in which the Śākya in Kapilavastu were attacked and massacred by Virudhaka, king of Kosala, in the lifetime of the Buddha. Some of the Śākya escaped the massacre and fled to other countries. The Chinese pilgrim *Xuan Zhang* was also told a similar Śākya legend, while he stayed at Swat (Uddiyana). He was told that the founder of the royal lines of Uddiyana was a Śākya who had escaped the massacre and come to Uddiyana to be king. His son Uttarasena (*Shang-jun*) had the Buddha's relics distributed because of his father's relationship with the Śākya. Uttarasena constructed a stupa at Uddiyana and deposited the Buddha's relics inside.

Recently, an interesting Kharosthi inscription has been found. The principal matter of the inscription is the dedication and re-dedication of the Buddha's relics. Senavarma, a ruler of Odi (Uddiyana), recorded his reconstruction of an old stupa, possibly the Uttarasena's stupa at Odi. In the inscription, Senavarma named his living and deceased relatives as contributors to the stupa. Uttarasena is mentioned among them. The inscription also tells us that Senavarma's contemporary Kushan ruler was Kujula Kadphises, who ruled in the first century A.D.

Thus, the Śākya legend of the royal Uddiyana might be traced back to the time of this inscription. The so called Indo-Scythians might be natives from the North-West Frontier of India, who spoke in Gandhari and wrote in Kharosthi. They were mostly Buddhists, followers of the Śākya's teaching, and they might have called themselves, or were called, descendants of the Śākya. Their ancestors were not the Scythians (Sakas) from Central Asia.